

## 東北帝国大学八甲田山高山植物園の整備過程及びその背景について

The construction process and its background of Mt. Hakkoda alpine garden, Tohoku Imperial University

西村 公宏\*

Kimihiko NISHIMURA

**Abstract:** The aim of this study is to obtain the construction process and its background of Mt. Hakkoda alpine garden, Tohoku Imperial University. The garden was established in 1929 as the branch of the Biological Institute of Tohoku Imperial University. In 1928 and 1929, a lot of rocks were piled up in the alpine garden which remains traditional Japanese design, in a part, by the famous Japanese gardener Toranosuke Shibata. The garden is consisted of many native trees such as shrubs and herbaceous perennials. The rock garden with various kind of alpine plants collected from several high mountains. They are all kept well in the natural conditions and are providing valuable research materials for researchers and precious scenic beauty for plants lovers. The garden was built with the financial support by Aomori prefecture for the purpose of rural promotion of the prefectural government. The landscape of the rock garden with surrounding mountains in the background was similar to that of the Linnaea garden in Switzerland.

**Keywords:** *alpine garden, rock garden, Mt. Hakkoda, Tohoku Imperial University, Yoshiji Yoshii, Toranosuke Shibata*  
キーワード：高山植物園，ロックガーデン，八甲田山，東北帝国大学，吉井義次，柴田虎之助

### 1. はじめに

東北大学植物園八甲田山分園の前身である東北帝国大学生物学教室附属八甲田山植物実験所（以下、八甲田山植物実験所）及び同八甲田山高山植物園（以下、八甲田山高山植物園）は、青森県八甲田大岳南西山腹海拔900mの約30,000坪の土地に設けられた植物生態学の実習・研究施設である。高山植物園の造築は昭和2(1927)年より柴田寅之助に委嘱され、東北帝国大学教授吉井義次による実験室での実習は昭和4(1929)年6月から、また、高山植物標本園としてのロックガーデン・湿地園の構築は昭和5(1930)年以降であったことが、『生物学教室五十年史』(以下、『五十年史』)において指摘されている<sup>1)</sup>。

ここでいうロックガーデンとは、17世紀末に日本や中国からイギリスに渡来した築山に、19世紀半ば頃より高山植物を植え始めたのが起源とされており<sup>2)</sup>、岩の美しさよりも、そこに植えられた植物の生育を重視している点で、新しいタイプの造園として位置付けることができ<sup>3)</sup>、造園史の立場からも注目されよう。

近代日本における高山植物園としては、明治35(1902)年11月、栃木県日光町佛岩に創設され、明治44(1911)年11月に、同蓮花石町に移転した東京帝国大学理科大学附属植物園日光分園(以下、日光分園)が知られているが、日光分園の場合、比較的市街地に近接した園内に、付近の高山及び信州地方等より高山植物の移植がなされており、ロックガーデンの意匠は、創設時は岩山、移転後は緩やかな斜面に石を据えた築山置石であった<sup>4)</sup>。これに対し、八甲田山高山植物園の場合、山腹に自生する高山植物等を現地において研究する八甲田山植物実験所と一体的に整備がなされたことから、高山に位置する園内に設けられたロックガーデンの意匠及び整備過程等が注目されるどころである。

そこで、本稿では既往の研究を踏まえつつ、東北大学植物園八甲田山分園や同大学史料館所蔵の資料及び大正期、昭和期の植物園関係者による論説、新聞記事及び図版史料等に基づき、八甲田山高山植物園の具体的な整備過程を、ロックガーデンを注視しつ

つ、その背景を含め明らかにしたい。

なお、本稿においては、人工的に山岳の趣のある岩組をつくり、岩間に高山植物等を植え込んだ状態をロックガーデンと定義し<sup>5)</sup>、高山植物標本園としての石(岩)山も同義として扱うこととする。

### 2. 八甲田山高山植物園の整備過程

ここでは、昭和4(1929)年6月発行の「齋藤報恩會 時報 第二十九號 昭和四年五月」に掲載された吉井義次による「八甲田山高山植物園並に実験所概説」(以下、吉井(1929))<sup>6)</sup>の内容、『五十年史』の記述の根拠となった昭和25(1950)年3月発行の「生態学研究第十一卷第三・四號」に掲載された吉井による「八甲田実験所の創設と“生態学研究”の創刊」(以下、吉井(1950))<sup>7)</sup>の内容、さらには、“SCIENCE REPORTS OF THE TOHOKU UNIVERSITY, 4<sup>TH</sup> SER(BIOLOGY), VOL. XVIII, NO.1949.”に掲載された“THE MT. HAKKODA BOTANICAL LABORATORY BY YOSHJI YOSHII”<sup>8)</sup>(以下、吉井(1949))の内容及び東北大学植物園八甲田山分園所蔵の写真や記録、東北大学史料館所蔵の公文書等より確認できる内容も踏まえ、これらを相互に比較検討することにより、八甲田山高山植物園の整備過程をロックガーデンに留意しつつ、明らかにすることとする。

#### (1) 高山植物園の建設：昭和2(1927)年～昭和3(1928)年

まず、吉井(1950)には、昭和2年…大學では先づ高山植物園の建設から開始することとして、造園の技術を柴田虎之助氏に委嘱された。柴田氏は東都に名を得た庭師であるが、震災後仙臺に居を移されてゐたのである。氏は齢既に60を超えてゐたが、壯者を凌ぐ元気で人夫を督し、叢林を開き一途に造園のことに當られ、夏季中に略ぼ植物園の外廓は成つた。

とあり、一方、吉井(1929)には、高山植物園は…全く大自然の御庭である、造園と云つても只隠れたるを世に出した程度である高山植物が群落をなして天然に

\* 茨城県土木部

生い育つ様が本園の誇りである。されば三萬坪程に亘る御庭には勿論柵を設けない、…形ばかりの正門から入ると直ちに灌木林の間に影を没することとなる、

と記していることから、昭和2(1927)年の夏、庭師柴田虎之助が取り組んだ約3万坪の園内の整備とは、天然の高山植物群落の観察ができるよう、敷地内に園路を設けることであつたと見ることができよう。

つぎに、吉井(1950)には、

私は翌昭和3年の3月に歸朝した。留學前からの宿題であつたから、特に歐米の植物園や特殊実験所の施設を視察して來た。即ちこの夏も造園は柴田老を煩し、実験所の建築は…4月の積雪中に起工した。…私は學生堀川芳雄君を助手として、八甲田山内廣く森林、濕原、湧泉などを踏査し、標本の採集や研究豫備調査を行つた。この8月には実験所の建築は略ぼ完了し、…10月降雪に及んで閉所した。斯くて翌4年に始めて実験所を使用し、實習と研究を行つた。

とあり、一方、吉井(1929)においては、

笹橋…を渡ると實驗室前の高山植物標本園に出る、此部には昨年以來石山を築き流水も取入れ、此地域に順次種々の高山植物を集め美しい高山植物標本園を造らんと期して居る、現在八甲田山麓中に自生する植物を移植したに過ぎぬが將來は此部分へ邦内各地の高山植物は勿論廣く世界各地の高山植物又は寒地植物をも集むる考へである。此築山上に立てばアカミノイヌツゲの梢を越して下方に谷地沼を含む本園の大部を一時に収め得る。標本園の前面にある建物が實驗所である實驗所は五十餘坪の平屋建で…物置小屋は稍や離れて後方にあり後庭は實驗園と栽培試験園とに分かれて居る、

と記されており、この記述が昭和4(1929)年5月現在であり、昭和3(1928)年10月には降雪により閉所したことを踏まえると、昭和3(1928)年夏には、石山、流水そして高山植物による高山植物標本園、すなわちロックガーデンの整備が柴田の主導により進められていたことが明らかになる。吉井が、高山植物標本園(ロックガーデン)に八甲田山のみならず、各地の高山植物を集める方針を明記している点も注目されよう。

## (2) 園内の構成：昭和3(1928)年

昭和3(1928)年時の園内の構成については、吉井(1929)に添付

された「八甲田山高山植物園」(図-1)、「見晴シ台より植物園並に實驗所遠望」(写真-1)、「實驗所(正面)」(写真-2)及び本文の内容より、園内北端の「正門」附近には、「見晴臺」、「アカミノイヌツゲ」等の灌木林及び「ガンカウラン」の群落地となっている岩裂があり、それらの西方には、「高山植物標本園」及び「實驗所」が設けられていた。そして、その西南方には「樹木園」の予定地と、「ミヅバセウ」が群生する「陰地性濕地」があり、さらに、園内中央は谷地で、「濕地植物群落」や「ハヒマツ」の純群落が占めていた。また、谷地の東には「岩盤」が、西にも「露出岩石地」があり、それぞれ「ハナゴケ」が群生していた。それらの南方には、「ブナの大木」からなる「潤葉樹林」、「アヲモリトドマツ」を混ざる「天然林」、「ミネカヘデ群落」、「シロバナノシヤクナゲ群落」及び「ダケカンバ林」が位置していた。このように、昭和3(1928)年時の園内には、植物生態学上貴重な植物群落や樹林が、岩盤等と共に複数存在しており、これらを観察するための園路も整備されていたことが確認できる。一方、園内北方に位置する高山植物標本園及び実験所の前の区画には、大量の石が積まれており(写真-1, 2)、石山等の整備が進められていたことが窺われるのである。

## (3) 石山の整備及び築造者：昭和4(1929)年

八甲田山植物実験所には、昭和4年度から昭和16年度までの記録(開所期間、来所者)及び経費(旅費、設備費、実験費、人件費)を記した「八甲田山植物実験所記録 第一冊」(以下、「記録」)が残されており、その概要をまとめたのが表-1である。この表より、昭和4年度(開所期間は6月24日から8月30日)の記述に、

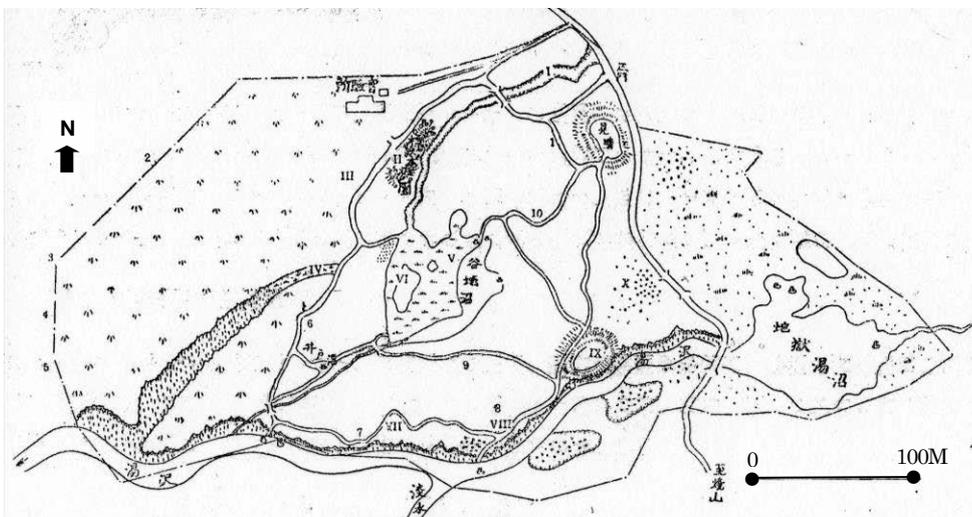
園内石山、實驗所前谷地ノ築造等ヲナス

とあることから、昭和4(1929)年夏にも、石山の築造等が進められたことが明らかになる。

また、「記録」には、

昭和4年(1929)7月20日實驗室前にて、吉井先生、…柴田虎之助氏

と添え書きがされた写真が貼られているが、八甲田山植物実験所所蔵の昭和4(1929)年以降の八甲田山植物実験所及び同高山植物園の写真等が貼られたアルバム(以下、「アルバム」)にも同じ写真(写真-3)が見られる。そして、この「アルバム」には、石



I ガンカウラン群落 II 高山植物標本園 III 樹木園(豫定地) IV ミヅバセウ群生濕地 V ハヒマツ群生地 VI 濕地植物群落 VII ミネカヘデ群落 VIII シロバナノシヤクナゲ群落 IX ダケカンバ林 X ハナゴケ  
1 アヲモリトドマツ 2 アヲモリトドマツ大木 3 アヲモリトドマツ 4 ブナ老大木 5 ブナ群生 6 アヲモリトドマツ  
7 ブナ大木 8 アヲモリトドマツ二本 9 ウダイカンバ大木 10 ヒメコマツ

図-1 八甲田山高山植物園(堀川作圖 吉井補正) 方位、縮尺加筆



写真-1 見晴シ台より植物園並に實驗所遠望(吉井(1929))  
左：石山 右：實驗所



写真-2 實驗所(正面)(吉井(1929))

山の写真(写真-4)も含まれており、写真-3に写っている15名の人物が、写真-4においても同じ服装で確認できることから、写真-3及び写真-4は共にほぼ同時期、すなわち昭和4(1929)年夏に撮影されたものであると考えられる。ちなみに、写真には暗い色の服を着て帽子を手に持った高齢の人物が写っているが、高齢という点からこの人物が柴田虎之助であると考えられる。また、「アルバム」には、人物が写っていない石山の写真(写真-5)も見られ、写真-4と比較すると、岩の間に一部見られる矮性植物及び岩の斜面に寝かせている中高木の状況から、写真-4と写真-5はほぼ同じ時期に撮影されたものと考えられ、特に写真-5は、手前に柵も見られることから、昭和4(1929)年夏の整備により、一応の竣工を見た石山を撮影したものであると見て良いであろう。背景の山(硫黄岳)が借景として映える大小二つの石山は、それぞれの上部に伝統的な日本庭園によく見られる立石が据えられ、庭師柴田の作風を窺うことができる。また、八甲田山彙中の植物を植込んだ二つの山の接合部には、階段を兼ねた石組みが見られ、この石段を上った山上からは、周囲の眺望を楽しむことができたと考えられる。ここで、日光分園のロックガーデンと比較すると、創設期の石山と一部類似が見られるものの、石を高く積み上げ、周囲の眺望も取り込んでいる点で、独自の意匠を確認することができよう。

なお、東北大学史料館所蔵の「東北帝國大學學報 第百貳拾號 東北帝國大學庶務課」には、

昭和四年十二月三十一日

願ニ依リ園藝手ヲ免ス (理) 園藝手 柴田虎之助

東北帝國大學庭園取締ヲ囑託ス 柴田虎之助

爲手當月額五拾圓ヲ給ス 會計課用度掛勤務

とあり、柴田は、昭和4(1929)年12月末日を以て、東北帝国大学の「園藝手」を退職したことがわかる。退職後も「庭園取締」を囑託されていることから、学内の庭園を管理する園芸手として、学内において評価を得ていたと見て良いであろう<sup>9)</sup>。ちなみに『五十年史』には、柴田が大正13(1924)年に、築山と池を植物学教室敷地の西側に設けたことが記されており<sup>10)</sup>、このような実績から、八甲田山高山植物園の造園も、柴田に委嘱されたのではないかと考えられるのである。

#### (4) 高山植物標本園の充実：昭和5(1930)年～昭和8(1933)年

吉井(1950)には、

昭和5年以後は園内に、高山植物標本園として岩山と湿原を築造することに重点を置いた。即ち翌6年からは遠く樺太や北海道に、或は早池峯、飯豊山、秋田駒ヶ嶽、藏王山などに、私自身或は園丁を派して、高山植物の蒐集に努めた。

とあるが<sup>11)</sup>、この記述より吉井にとって高山植物標本園(ロックガーデン)の築造とは、単に石(岩)山を組み上げるだけではなく、さらに各地から蒐集した高山植物を石の間に植込み、高山植物の標本園に相応しい状態まで造り込むことを指していたと見てよいであろう。表-1からは、昭和6年度から昭和15年度までほぼ毎年「採集費」が計上されていたことがわかり、園丁の「小畑進」や「渡辺吉平」等が対応していたことがわかる。この時期、高山植物標本園(ロックガーデン)の築造は、これら園丁の活動に支えられていたと見ることができよう。

また、湿原の築造については、吉井(1929)において、

西方の谷地も…昨年より此泥砂を掘り始め又實驗室前の高山植物標本園より流水を此處に導く計畫も立て以て湿原並に沼澤地の植物を移植し始めた。岩上又は乾地高山植物を集むる實驗所前の標本園に對し高山湿地植物標本園を造らんとしつゝあるのである。

と記されており、昭和3(1928)年の段階で、西方の谷地において高山湿地植物標本園としての湿原の整備に着手していたことが知



写真-3 昭和4年(1929年)7月20日實驗室前にて(「アルバム」)



写真-4 無題(石山における集合写真「アルバム」)



写真-5 無題(石山「アルバム」)



写真-6 無題(高山湿地植物標本園「アルバム」)

られ、一方、表-1の昭和6年度には、

実験所前谷地ノ取拵、  
とあり、昭和4(1929)年においても実験所前谷地の築造がなされていたことを踏まえると、湿原は、昭和3(1928)年より昭和6(1931)年にかけて整備がなされたと見てよいであろう。そして、「アルバム」には、実験室の南側を撮影した写真(写真-6)が含まれており、周囲に名札や石を配した池が確認できることから、高山湿地植物標本園としての湿原は、実験所前の南側西寄りに築造されていたことが確認できるのである。

なお、園内の状況については、昭和6(1931)年12月発行の「自修會報XVII」に掲載された「蝕佛生」による「八甲田山實習記」に、

実験所建物の前には八甲田山の方々から集められた珍奇の高山植物が集められてあつて、何人の縦覧にも供せらるるやうになつて居る。他の場所は天然のままを園に當ててあつて「しらかば林」「しやくなげ」の叢生して居る岡、その間に所々に湯がブクブク沸き立つて、種々の木々の間から白い湯気が登つて居る様は、まだ溶け切らぬ所々の雪と共に高山の氣分を濃厚にする。  
とあり<sup>12)</sup>、実験所建物の前は、「珍奇の高山植物」が集められた場所であり、「何人の縦覧」にも供せられる空間であったことが明らかになるのである。

### (5) 施設公開と来園者の増加：昭和9(1934)年～

昭和9(1934)年以降の状況については、吉井(1950)に、昭和9年…この夏省營バスの開通があつて、青森驛から僅か1時間半程で大岳中腹900米のこの地まで達し得ることになった。即ち高山植物園の來觀者は漸く多く、高官貴紳の來訪も急に繁くなつて來た。斯くて高山植物園は略ぼ整備されたので、園内の実験圃場を擴張し、藥草や特殊作物の試験栽培を行ひ、高冷地利用の研究も開始された。

とあり、一方、「東北帝國大學一覽 自昭和九年 至昭和十年」に掲載された「本學各學部公開所」には、「理學部附屬臨海実験所水族館」、「理學部地質學古生物學教室附屬標本室」と共に「八甲田山高山植物園」が紹介されており、

八甲田山高山植物園ハ…目下無料ニテ一般觀覽ニ供ス…幾多ノ高山植物自生繁茂シ其ノ植物群落ハ變化多ク植物園自體既ニ天然ノ一大高山植物園ノ觀アリ…園ノ一隅ニハ植物實驗所アリ…實驗所附近ニハ高山植物標本園、高山樹木園、栽培試験園ヲ設ケ八甲田及各地ノ高山、寒地ニ産スル植物ノ研究試験ヲ行フ園ノ大部分ハ大體自然ノ状態ヲ保タシメ…來觀者ヲシテ大自然ノ美ヲ賞觀シテ飽クコトナカラシム

とあることから<sup>13)</sup>、八甲田山高山植物園では、昭和9(1934)年以降、バスの開通もあり來觀者が増加したこと、表-1からも明らかのように、皇族や政府要人の觀覽も見られたこと、また、この頃には、高山植物標本園及び高山樹木園も充実し、学内において公開施設としての位置付けが明確になってきたことが知られるのである。

そして、「文部省社會教育局」による「教育的觀覽施設一覽」に八甲田山高山植物園が掲載されるのは、「昭和八年四月一日現在」からであるが、「昭和十一年四月一日現在」には「高山植物數百種」、「昭和十五年四月一日現在」には「草木五〇〇點、昆虫一〇〇點、外に寫眞五〇點」とあり<sup>14)</sup>、昭和9(1934)年以降も、園内において高山植物標本の充実が図られていたことが窺われるのである。

さらに、吉井(1949)においては、多種にわたる樹木、灌木、草本、多年生植物、そして各地の高山及び寒冷地から集めた高山植物が自然な状態で生育しており、植物学者の研究や、高山植物愛好家の觀覽に供せられていたと記され、口絵には、吉井(1929)とは異なり、ロックガーデン(写真-7)と湿原(Swamp)が、建物、湿地植物群落、大岳遠景と

表-1 八甲田山植物実験所の開所期間・来所者等  
(昭和4年度～昭和16年度)

年度(昭和)	開所期間(月、日)	備 考
4	6.24-8.30	吉井義次、柴田虎之助 他22名 園内石山、実験所前谷地ノ築造等ヲナス
5	6.28-8.31	吉井義次 他16名 人夫主トシテ園内ノ笹刈ヲナス
6	6.22-8.31	吉井義次、小畑進(園丁) 他14名 採集費(樺太)50円 人夫、実験所裏地均シ、実験所前谷地ノ取拵、園内道路修理ヲナス
7	6.19-9.1	吉井義次、渡辺吉平(園丁) 他19名 採集費(早池峯)30円
8	6.19-9.9	吉井義次、小畑進 他14名 採集旅費(樺太、小畑、猶原)140円 寄宿舎建設 翌年夏期ヨリ使用ス
9	5.20-10.15	吉井義次、小畑進 他18名 8月、十和田省營バス開通
10	5.21-10.8	吉井義次、安藤元治(園丁) 他27名 採集費(蔵王)30円 朝香宮鳩彦王殿下、伏見宮博恭王殿下、秩父宮並同妃殿下台臨
11	5.24-11.1	吉井義次 他17名 採集費50円(渡辺20、渡辺、小畑30) 秩父宮妃殿下、高松宮妃殿下、三笠宮殿下台臨 廣田首相、村去相來訪 特別實驗室増築
12	5.26-11.3	吉井義次 他18名 採集費45円(園丁 渡辺)
13	5.25-10.1	吉井義次 他13名 採集費65円(園丁 小畑)
14	—	吉井義次 他12名 採集費95円(園丁2名)
15	—	吉井義次 他10名 採集費90円(園丁 小畑)
16	—	吉井義次 他13名

表-2 八甲田山高山植物園の整備過程  
(昭和2年度～昭和15年度)

年度(昭和)	園内の整備等
2	園内造園を柴田寅之助に委嘱 複数の植物群落が生ずる園内に園路を整備
3	3月、吉井義次帰国 実験所前東側：岩山の築造に着手 実験所前西側：湿原の築造に着手
4	岩山完成
6	湿原完成
7～8	園丁の小畑、渡辺等、各地(樺太等)で高山植物を採集(標本園の充実)
9	高山植物標本園(ロックガーデン)、湿原及び高山樹木園、大学の公開所として位置付けられる
10～11	皇族、政府要人觀覽 小畑、渡辺等、高山植物を採集
12～14	小畑、渡辺等、高山植物を採集
15	小畑、高山植物を採集 草木500点、昆虫100点

共に取り上げられていることから、ロックガーデンや湿原は、昭和24(1949)年の段階でも、園内の主要な施設の一つであったことがわかる。

なお、昭和2(1927)年から昭和15(1940)年までの園内整備の概要をまとめたのが表-2である。この表より、園内、特に高山植物標本園については、吉井、柴田及び小畑等の努力により着実に整備が進んだことが確認できるのである。

### 3. 八甲田山高山植物園整備の背景

ここでは、青森県における代表的な地元紙である「東奥日報」に掲載された八甲田山高山植物園に関する記事及び関連する論説、公文書及び図版史料等を検証することにより、八甲田山高山植物園の整備方針及び整備の背景を明らかにしたい。

#### (1) 整備方針

まず、大正13(1924)年7月13日付の「東奥日報」には、日本唯一の高山植物園…青森縣の八甲田山を東北大學の高山植物園として提供しようとの議は青森縣側から出たもので大學では畑井教授等をして秘密裡に交渉してゐるが昨今に至り大体纏まるところまで進んだといふことである八甲田山には八百

餘種の高山植物が野生して居りその温度は北緯五十度邊のそれに相當してゐるので之が植物園にすれば南北樺太やシベリア乃至千島の北部に生育する寒帯植物の各種類を移植することが出来るといふことである。山上は場面が廣く風景がよく登攀に困難ならず植物研究園としては屈強の場所である

とあり、八甲田山に高山植物園を設置しようとする構想は青森県側から出たこと、そして、800余種の高山植物が自生する園内へ樺太等の寒帯植物を移植する整備方針については、大正13(1924)年の時点で検討されていたことが知られるのである。

一方、大正14(1925)年11月3日付の「東奥日報」に掲載された、吉井による「八甲田高山植物研究所の設置について」には、我國高山植物帯を構成するものに二種の別がある。一は關東地方に見るもの、他は東北地方から北海道に在るものである。高山植物の種類の豊富なること固有の植物の多きこと華麗なることは、信飛の高山の特徴である。…其御花畑の如き花色の變化花種の艶麗華美にして實に自然の花園の名に恥ない…理想の自然の高山植物園なりと云へる。然し此の單に種々の特殊の高山植物を持つと云ふことが、高山植物研究所の只一つの目的なりとせば、吾々が人工的に高山植物園を構造し、各種の植物を集めることによりても其の一半の目的は達せられる。其等は寧ろ高山植物の標本園と云ふべきで、これによりて植物研究の總てが盡くさるべきではない。

とあり、信飛の華麗なる御花畑を理想の自然の高山植物園と評価しつつも、種々の特殊の高山植物を持つことだけが、高山植物研究所の目的ではなく、これらはむしろ、高山植物標本園として人工的に造ることも可能であるとしているのである。そして、

此等高山植物と云ふ特異の植物の生育状態と、其の外界との關係を攻究する上には、…地勢、土質、其他の限りなき變化の地、此に夫々特異の植物の群生する所、此處に幾多の興味ある植物適生の研究が見出され得るのである。…北海道から東北地方に亘る高山は、信飛の諸峰に比し種類は少きも其數量の多き點が優つてゐる。前者に見る御花畑の麗は望むべからざるも、其の壯は求め得る。…此八甲田山が、植物の數量豊富なる、極多様な植物群落を其の異なる地點に現すことが、實に東北地方高山植物帯の代表であると云へる譯で、私が八甲田山に研究所設立を望む理由の一つである。

と記しており、日本の高山植物帯の内、東北地方及び北海道地方においては、地勢や土質等が多様であり、それぞれ特異な植物の群落が見られることから、興味ある植物適生の研究が可能であると述べ、特に八甲田山は、植物の數量が豊富で、植物群落も多様であることから、研究所の設置に相応しい土地であると主張しているのである。

このように、吉井は、八甲田山に高山植物園を整備する理由を多様な植物群落に置いていたが、寄付者である青森県側の意向にも配慮し、高山植物標本園(ロックガーデン)の築造を含む園内の整備方針を固めたのではないかと考えられるのである。

## (2) 整備の背景

昭和5(1930)年4月16日付の「東奥日報」に掲載された、吉井による「八甲田山高山植物園並に植物実験所の建設終了に際して」には、

わが東北帝國大學が仙臺と相去る遠き八甲田山に高山植物園をもつことになつたのも一に青森縣民諸君の熱心なる希望に基いたものである、…植物の種類も多く殊に其植物群に至つては極めて變化にとむ點がある、…將來青森市から…十和田街道に合する縣道が改修される時はこの植物園や実験所はわが國有数の一大國立公園の内に含まれる様な形にもなり一層有益に園や研究所の使命も果たされることと思はれる 一体八甲田山に出来た試験所のやうな特殊な研究所は外國にも從來は類例が少な



写真-7 Rock Garden (吉井(1949))



写真-8 ROCKERY AT BOURG-SAINT-PIERRE (LINNAEA GARDEN) (Correvon(1911))

かつたのである、…わが國でもこの方面の研究所は植物に關する限り未だなかつたのでこの八甲田山の實驗所が實にこの方面での嚆矢であるといへる。…園は經費の都合上高山植物園としてはなほ設備不充分であるがこの場所の大自然の背景がよくこれを補ふて餘りあるから將來完備するに至ればこれ亦わが國唯一にして然かも海外のものに比しても遜色なき位置に達し得ることも困難のことと思はれない…わが國で始めて開始されたこの意義ある實驗所が健全なる發達をなし以て縣民諸君の厚意に報ゆる日の近からんことを望む次第である。

とあり、國立公園や諸外國の施設にふれている点が注目される。

まず、國立公園の問題については、大正13(1924)年12月6日付の「東奥日報」に、

八甲田山に高山植物研究所 縣會滿場一致建議提出…東北帝國大學生物學擔當教授一同の言によれば八甲田山は特殊の地貌を具へ…純高山性植物の繁茂を見る研究の便益蓋し測り知るべからざるものあらん…十和田湖附近の大森林を擁するあり此地に高山植物研究所の設置せらるゝあらば將來淺蟲の臨海實驗所と相俟ちて生物學の研究に資する所絶大なるべく延いて世界學術の進歩に貢獻する所少なからざるべしといふ翻つて本縣との關係を考察するに淺蟲に於ける東北帝國大學臨海實驗所は本縣よりの土地金員の寄附により既に豫定の計畫を完成し爾來學者の研究に多大の便益を与ふるのみならず知名の士の讀々來訪するありて淺蟲は本邦の名勝として予期以上に顕はれたるの觀あり…世界の代表的學者挙つて來訪すべき豫定なりと聞く是れ正に本縣を汎く世界に紹介すべき絶好の機會なりとす…

本縣が多年努力せる十和田湖の紹介及び発展の如きも期して俟つべきなり要するに八甲田山に於ける高山植物研究所の設置は之を既設の臨海実験所の成績に徴し學術の進歩に及ぼす影響並に本縣の利益より觀て最も適切なる計畫なりと信ず 大正十三年十二月

とあり、さらに、国立公文書館所蔵の「議院回付請願書類原議(自大正十四年至大正十五年)十二」には、

意見書…十和田湖ヲ中心トスル国立公園設置ノ請願…右請願ノ要旨ハ青森、秋田兩縣ニ跨ル十和田湖ヲ中心トスル附近一帯ハ秀麗比類ナキ大自然ノ景ニ富ミ交通亦便利ナルヲ以テ遊覽者極メテ多シ而シテ東北帝國大學ハ全國中最理想的ナリトシテ世界唯一ノ高山植物研究所ヲ酸ヶ湯附近ニ設置スルニ決シ又現ニ淺蟲温泉ニハ全國唯一ノ臨海實驗所ノ設ケアリ斯ノ如ク十和田湖ヲ中心トスル一帯ノ地ハ自然ノ美ト人爲的設備トヲ具フルカ故ニ該地方一帯ヲ包含スル国立公園ヲ設置セラレタシト謂フニ在リ 衆議院ハ其ノ趣旨ヲ至當ナリト認メ之ヲ採擇スヘキモノト議決セリ…大正十五年三月廿五日

とあることから、青森県が八甲田山高山植物園の建設費を寄付した背景には、単に八甲田山の知名度が上がるだけでなく、十和田湖を中心とする国立公園の設置に資するという意図が窺われる。吉井も、このような青森県側の意図に配慮し、あえて国立公園の問題にふれたのではないかと思われるのである。ちなみに、十和田国立公園の指定は、昭和11(1936)年2月1日である<sup>15)</sup>。

また、諸外国の施設については、吉井(1929)に、英國には有名な高山植物園が多いが、皆低地に在るもので今此處に云ふ部類に入らぬ、…獨逸で著しいのは泥炭植物研究所で又高山植物園も二三各地の高山に在るが其の研究の盛んなる點は瑞西に及ばぬ。瑞西には世界的に有名な高山植物園(並に實驗室)が伊太利との國境サンベルナルの分水嶺近くにあり現在ゼネーブ大學のショダール教授が管理して居る。

とあり、一方、ショダール(R. Chodat)が、1915年発行の“Bulletin de la Société botanique de Genève. Sér. 2”に発表した“Le Jardin alpin et le laboratoire de biologie alpine de la Linnaea a Bourg-Saint-Pierre”には、サンベルナルの近くのサンピエールに、コルヴァン(H. Correvon)が「リンネア」(La Linnea)という高山植物園を築造したこと、そして、1915年には、リンネアに高山植物の実験室が設けられたことが記されている<sup>16)</sup>。さらに、コルヴァンが1911年に著した“The alpine flora”に掲載された“Rockery at bourg-saint-piere (Linnaea garden)”(写真-8)からは、リンネアに設けられたロックガーデンの外観を確認することができる<sup>17)</sup>。周りの山を背景に高山植物が映えるリンネアの石組みについては、八甲田山高山植物園のロックガーデンとの類似が見られ興味深い。吉井は、高地に設けられた高山植物園としてリンネアに着目し、そのロックガーデンの配置や意匠についても参考にしたのではないかと考えられるのである。

#### 4. おわりに

本稿では、東北大学植物園八甲田山分園所蔵の資料等に基づき、八甲田山高山植物園の具体的な整備過程及びその背景について、ロックガーデンに注視しつつ検証した。八甲田山高山植物園では、まず、昭和2(1927)年夏、敷地内に見られた貴重な植物群落等をつなぐための園路が配され、昭和3(1928)年夏に高山植物標本園としてのロックガーデンの整備にも着手され、昭和4(1929)年夏には石山がほぼ組みあがるが、これらの工事は園芸手柴田虎之助が担当し、周囲の風光が楽しめる二つの石山の山頂には立石が据えられた。さらに、昭和6(1931)年以降、園丁等が各地より採集した高山植物が石山に植込まれ、昭和9(1934)年より、高山植物標本園(ロックガーデン、湿原)は、高山樹木園と共に、大学の

公開所として位置付けられた。吉井義次教授の整備方針は、豊富で多様な高山植物群落を有する山腹の一部を高山植物園の敷地とし、併せて敷地の一部に高山植物標本園(ロックガーデン、湿原)も設け、各地に自生する高山植物を集めるというものであったが、このことは、高山植物園の建設費を寄付した青森県が、当時推進していた十和田湖を中心とする国立公園の設置の請願にも資するものであった。なお、周りの山が背景となる位置にロックガーデンを設けることについては、ジュネーブ大学教授ショダールが管理するリンネア高山植物園に、同様なロックガーデンが設けられていたことも影響したのではないかと考えられる。

八甲田山高山植物園は、植物生態学上貴重な八甲田山の植物群落と各地の貴重な高山植物を併せ持った施設として整備が進められ、約90年が経過している。近代日本の文化遺産として適切な保護が望まれよう。

謝辞:本研究を進めるに当たり、下記の機関等の方々より、多大なご支援を賜りました。ここに感謝の意を表します。東北大学植物園(八甲田山分園)、同史料館、同附属図書館(北青葉山分館)、同施設部、同東北生物学同窓会、国立公文書館、青森県立図書館、みどりの図書館東京グリーンカブス、文京区立森鷗外記念館、茨城県立図書館

#### 補注及び引用文献

- 1) 東北大学理学部附属植物園内生物学教室五十年史刊行委員会(1980): 生物学教室五十年史:同会,80-85,147-155
- 2) 針ヶ谷鐘吉(1977): 西洋造園変遷史:誠文堂新光社, 326
- 3) 春山行夫(1980): 花の文化史:講談社, 314-315, 754-758
- 4) 西村公宏(2016): 拡充期の東京帝国大学附属植物園日光分園におけるロックガーデンの整備について:ランドスケープ研究 79(5),443-448
- 5) 東京農業大学造園科学科編(2013): 造園用語辞典:彰国社,582
- 6) 吉井義次(1929): 八甲田山高山植物園並に實驗所概説(附植物園案内): 齋藤報恩會 時報 第二十九號 昭和四年五月, 1-12, 口絵, 附図 この論説は、『十和田湖八甲田山』でも一部紹介されているが、本稿では、高山植物園内の整備状況について検証した。
- 7) 品川弥千江(1974): 十和田湖八甲田山: 東奥日報社,67-69
- 8) 吉井義次(1950): 八甲田山實驗所の創設と“生態學研究”の創刊, 吉井教授研究録: 生態學研究第十一卷第三・四號, 217-226,32-36
- 9) YOSHJI YOSHII(1949): THE MT. HAKKODA BOTANICAL LABORATORY: SCIENCE REPORTS OF THE TOHOKU UNIVERSITY, 4TH SER(BIOLOGY), VOL. XVIII, NO.2,1949, 247-254,PLATE
- 10) 柴田は、東京千駄木団子坂で千寿園を経営した植木師で、作品としては、千寿園の近所に建てられた森鷗外の居宅「鶴朝楼」の庭園がある。森潤三郎(1942): 鷗外森林太郎: 丸井書店,66-68
- 11) 東北大学理学部附属植物園内生物学教室五十年史刊行委員会(1980): 前掲書
- 12) この記述は、『五十年史』においても紹介されているが、本稿では、『記録』における記述と比較検討するために取り上げた。昭和9(1934)年以降の記述についても同様である。
- 13) 蝕佛生(1931): 八甲田山實習記: 自修會報 XVII,57-60
- 14) 東北帝國大學(1935): 東北帝國大學一覽 自昭和九年 至昭和十年, 同書,360-361 沿革畧より昭和9(1934)年7月頃までの記述であると考えられる。
- 15) 伊藤寿朗監修(1990): 博物館基本文献集 第9巻: 大空社
- 16) 官報 第二千七百二十三號
- 17) H. Chodat(1915): Le Jardin alpin et le laboratoire de biologie alpine de la Linnaea a Bourg-Saint-Pierre: Bulletin de la Société botanique de Genève. Sér. 2,188-211
- 18) H. Correvon, P. Robert (1911): THE ALPINE FLORA, 口絵 “THE ALPINE FLORA”は、コルヴァンが著した“La flore Alpine”の英語版である。

(2019.9.28受付, 2020.3.30受理)